

# 幼児教育における英語

つくば国際短期大学附属幼稚園における「英語の時間」の  
授業及び早期英語教育について

## English for Pre-School Education

In Reference to “English Class” in Tsukuba International Junior College  
Kindergarten and Early Childhood English Education

中山 千 章  
Chiaki NAKAYAMA

## 1. はじめに

現在は英語の第三次ブームだそうだ。第一次ブームは戦後の英語ブームで、第二次は東京オリンピックの時である。現在の英語ブームは、とくにこれといった社会的背景が見当たらない。何故ブームになったのだろうか。原因として考えられるのは、国内の外国人の増加、パソコンの普及、またはマスコミ等で盛んにグローバリズムを取り上げているためであろうか。とにかく、このブームで英語に対する認識が大きく変わってきている。テレビでは毎日のように英会話学校のコマーシャルが流れ、大学生や社会人はTOEICやTOEFL等の資格試験に熱心に勉強しており、子供たちはデズニー英語に代表される早期英語教育に取り組み始めている。

文部科学省においても、ここ10年程のうちに、英語は文法・読解中心の授業から、コミュニケーション重視に移り、昨年（2002年）の4月から、小学校の3年生以上の生徒から、英語導入反対論があるなか、「国際理解教育」と称し外国語教育を実施し始めた。外国語といっても、小学校で実施されるのはもちろん国際的に最も共通語として広く認められている外国語、つまり英語を「国際理解教育」で教えることになるのは明らかである。

「国際理解教育」とは何であろうか。文部科学省の説明によると、子供に外国語、例えば英会話に触れる機会、外国の生活・文化に慣れ親しむ機会を持たせる、外国語の発音を身につける、及び中学校以降の外国語教育の効果を高めることにあるとしている<sup>①</sup>。つまり、小学校の「国際理解教育」の時間において、子供たちが英語に親しみ、遊びを通して自然の形で異文化に触れることによって、コミュニケーション能力を高めようとしている。そこには、急速にグローバル化していく世界的な流れのなかで、何としても世界的に有名な日本人の弱い英語力（TOEFL や TOEIC の結果はアジアでつねに最下位の状態である<sup>②</sup>。）を高め、世界共通語の英語でコミュニケーションがとれる人材をなるべく多く育てたいという社会的背景があると思える。

小学校への英語導入の決定を契機として、子を持つ母親たちの意識改革を促したのかどうかはよく分からないが、保育園や幼稚園を初めとして、日本中で早期英語教育ブームが起きていることは間違いのない事実である。筆者が現在教えているつくば国際短期大学附属幼稚園でも、昨年の4月から「英語の時間」が設けられ、園児の英語教育が始まったところである。幼稚園での英語教育は、もちろん父兄からの要望もあって始まったわけであるが、幼稚園での英語教育の是非については、小学校での英語導入と同様専門家の間でいろいろな議論がかわされている。

この論文では、幼稚園における幼児の英語教育について、つくば国際短期大学附属幼稚園で実施されている「英語の時間」に言及し、幼稚園等の英語教育の是非、有効性・理解度、年少児のカリキュラム、英語ブーム等について論ずる。

## 2. サイトとしてのつくば国際短期大学附属幼稚園について

つくば国際短期大学附属幼稚園は現在年少児クラスが2クラス、年中児が2クラス、年長児が

1クラスであり、1クラスの人数は約25～30名で構成されている。幼稚園全体の園児数は12月現在で計136名になる。幼稚園では昨年から「英語の時間」を設けられ、週に1回（月曜日）だけであるが、1クラス約20分程の英語の授業が実施されている。英語の先生は筆者ともうひとりの短大の先生が担当している。筆者は昨年に引き続き年少児クラスを受け持っている。他に、今年度からネイティブの先生が教える英語クラスが、希望する園児に対してのみ、週1回放課後におこなわれている。

「英語の時間」の授業の実施にあたって、教室にいるのは英語の先生だけでなく園のクラス担任もいる。担任がいることによって、園児は落ち着いて授業ができる雰囲気になる。年少児の授業ということもあり、ひどく騒いだり、泣き出したり、時には喧嘩したりすることもある。そのような時に、担任にサポートしてもらい、授業がスムーズに運営できるようにする。英語の先生は園児たちの性格がよくわからないので、幼稚園にて授業を滞りなく進めるには担任の協力は是非とも必要である。

他に、授業の準備もサポートしてもらおう。授業はいつも月曜日の9時40分から始まるので、それまでに授業に必要なもの、例えば、机の配置変えとか、絵カードの準備等をしてもらう。園児たちは、英語の授業が始まるのを待っているあいだ、英語の挨拶の練習をしつづけている。

今年は4月の初めに、幼稚園から1年間の「英語の時間」及び園の行事等が記入された年間スケジュールを渡された。授業数を数えてみると、夏休みや冬休み、他に行事なども数多くあって、授業回数は年間30回ほどしかとれない。1回の授業時間を20分として計算すると年間の授業時間数は合計で10時間。これだけの時間で、年少児の園児たちに教えるとなると、「英語の時間」の意義は英語を学ばせ習得させることより、むしろ英語を十分に楽しんでもらい、英語は面白いと感じさせることにある。

### 3. 英語の時間の授業について

英語の勉強というとならずアルファベットを覚え、次に簡単な文を文法的順序に従って学習していくと思うかもしれない。しかし、幼稚園の英語教育においてはそのようなことは全くしない。歌、絵カード、ゲーム等で子供たちを楽しく英語の世界に導いていく。つまり、文字を使つての英語、読み書き等は全くせず、音声を中心にして英語に触れ、楽しむ授業である。

子供はどの子供でも同じであろうが、集中力はあまり高くない。園児たちに英語を楽しんでももらうには、いかにあきさせないで、授業を続けていくかが先生の腕のみせどころである。子供は心が正直なので、興味がわかない面白くない授業をすると、すぐつまらなそうな表情をするのですぐわかる。そうならないように、幼児英語の先生はいろいろと創意工夫をすることになる。

つくば国際短期大学付属幼稚園で「英語の時間」が設けられたのは昨年からであり、まだ授業において、何をどのように、どの程度教えればよいか、よくわかってないことがある。もうひと

りの先生と毎回のように授業の進め方を相談しながら、試行錯誤の状態を進めている。

筆者は年少児クラスを教えているが、授業は教室に入るときの挨拶言葉から始まる。もちろん挨拶は英語を使って、Good morning, boys and girls. とか、Hello, everyone. How are you, today? とか言いながら教室に入っていく。このとき、園児たちが元気に応答したときは、その後の授業が盛り上がり、スムーズに進めることができる。逆に、この最初の挨拶の1～2分間で、雰囲気盛りあがらなないと、後の授業もスムーズにいかない。

幼稚園の授業はムードで決まるといってもいいだろう。最も園児は勉強しているという意識がなく、英語で遊んでいると思っているので、当然といえば当然だろうが、園児のムードを高揚させたまま授業を最後まで続けるには、英語の先生は教えるだけでなく、同時にエンターテイナーとしての努力が必要である。

挨拶が済んだ後は、大抵いつも体を動かしながら、顔や手足等の身体の部位を手や指で指し示したり、掴んだりしながら What's this? とか質問し、大きな声で答えてもらうようにする。他に、園児たちが好きそうな動物や果物の絵カードを使って、その名前を言ったり、教室にあるものや壁の飾りつけ等を指差したりしながら、同じように What's this? や What's that? などと質問しながら進めていく。授業中は、園児たちの興味をそらさないよう、教室の中をぐるぐる回りながら、園児のひとりひとりに What's your name? とか、Do you like this? とか話しかけたり、または、たえず園児の注意を引き付けるため、Touch your nose. とか Touch your head. とかいうてアクションを促すようにしたりしている。

動物の名前を導入したときは、その鳴き声もついでに覚えるようにする。園児たちは動物の鳴き声が日本語と違うので楽しそうだ。方法としては、例えば、犬なら、犬の絵カードを示しながら園児たちに What's this? と質問し、dog と正しい答えがかえってきたら、Yes, it's a dog. What does a dog say? といって、泣き声を当ててもらおうようにする。Bow wow という正しい答えが出たら、Yes, it says "bow wow." といって、そのあとクラス全員の子供に大きな声で斉唱してもらう。

英語の歌を授業に使うことは幼児英語にとってはとても重要である。子どもが初めて日本語の歌を歌うときでもそうであるが、発音がまだ上手にできなくてもリズムが取れなくても一生懸命に歌おうとする。子どもは歌うことが本来好きだし、また歌うことによって日本語のリズムや発音を覚えていく。英語の歌も同じで、楽しく歌うことによって、英語独特の発音、リズム、イントネーションを自然と楽しみながら覚える<sup>4)</sup>。また一度覚えてしまえば不思議なことに、長い間忘れることがないので、英語の歌は毎授業において必ず使うようにしている。歌の効果をより高めるには、前もって簡単な身振り手振りを考えておき、子供と一緒に身体を動かしながら歌う。子供は体を動かすのが好きだし、身体を使えば歌うのに心理的圧迫が少なくなり、覚えもはやくなるからである<sup>5)</sup>。

他に、授業で注意していることは、なるべく英語だけを使って授業をしようとしている。これは、日本語ではない違う世界があることを、園児たちに自然に認識してもらう最もよい方法であると思うからである。しかし、英語だけではどうしても授業がうまくいかない場合、例えば、子供たちがどう先生の質問等に反応してよいかわからないときは最小限の日本語を使うようにしている。子供のコミュニケーション能力には素晴らしいものがある。ことばの意味がわからなくても、その場の雰囲気や身振り手振りで、日本語を使わなくてもなんとなく意思が伝わってしまうからちょっと不思議な感じがする。

#### 4. 園児たちの英語の理解について

園児たちはけっこう英語の時間を楽しんでいるが、理解度においては個人差が大きいようである。何にでもよく反応し、答える園児もいれば、まったく何の反応も示さない子もいる。一般的に明るくて元気な子供は、そうでない子供と比較すると、英語に関心を示し、理解度も高いようである。しかしながら、年少児クラスにおいては、言葉がまだ発達過程にあり、母語の基礎ができあがっていないため、英語理解度の差は、そのまま母語の日本語の運用能力による差であるようにも思える。そこで、日本語の言葉による差と英語の理解度の関連性を調べてみることにした。

年少児のため正確なデータをとるのは難しいので、聞き取り調査をすることにした。担任の先生から普段の観察による各園児の話し言葉の能力について、各園児の日本語運用能力を3段階レベル（よくできる3、少しできる2、あまりできない1）に分けてもらい、筆者が英語の授業時の応答から判断した英語の理解度レベル（同様に3段階）との関係を調べた結果、29人中21人（72.4%）が日本語と英語の理解度レベルが全く同じであり、相関が高いことがわかった（ $r = .792$ ）（資料、表1、図1,。）。

英語の理解度は年少児の場合、言葉（母語）の運用能力に関係しているのなら、園児の月齢による差も当然ながら英語の理解度とも関係があると仮定し、月齢との関係についても調べることにした。英語の理解度を測るのも年少児には難しいので、授業中の応答等から判断し、園児を3段階のレベルに分け、月齢と英語の相関関係を調べた結果、やはり相関がかなり高いことがわかった（ $r = 0.597$ ）（資料、表2、図2）。しかし、相関の度合いは月齢の差よりも日本語運用レベルによる差の方が高かったといえる。

園児の中には「英語の時間」が楽しくて、知っていることを次々と発言する子供もいれば、こちらからいくら質問しても全く何の反応も示さないのもいる。クラスについても同じことがいえる。筆者は2クラス受け持っているが、ひとつのクラスは人数が多いのにもかかわらず園児たちが毎授業楽しく受け答えをする。しかし、もうひとつのクラスはいまいち反応度が低い。月齢差によるかもしれないと思い、月齢差について調べたところ、それぞれ51.4ヶ月と49.0ヶ月であり、

月齢による差は2ヶ月ほどであった。やはり反応が低いクラスのほうが月齢的にも低かったが、これが有意であるかどうかは判断しにくい(資料 表2, 表3)。しかし、反応度が低いクラスには、途中入学者(4月入学ではなく、満3歳時になって入ってきた子供)が5名いるとのことや、他にも言葉が遅い子供や、少し多動性的傾向がある子や、情緒コントロールが上手にできない子供が3人ほど含まれているとのことであった。それらが原因となっていて、授業の雰囲気はもうひとつ盛り上がらないのかもしれない。

## 5. 英語の時間で使う歌や語句

年少児クラスの英語の時間において使う歌は同じ言葉が繰り返し現れ、子供たちでも簡単にすぐに楽しんで歌えるような歌を選んでいる。子供は歌が好きなので、良い歌を選定すれば自然に英語に親しみがわき、何度も歌っているうちに英語の自然な音の流れ、つまりリズムやイントネーション等が身についてくる。参考までに、ここに年少児クラスでよく歌われている歌を挙げておく。

年少児クラスでよく歌われている歌は：“The alphabet” “Are you sleeping?” “We wish you a Merry Christmas” “London Bridge is falling down” “Head, shoulders, knees and toes” “Twinkle, twinkle, little star” “Row, row, row your boat” etc.

語句についてはおもに、毎日使う簡単な挨拶言葉を初めとして、身体の部位名、子供たちが好きな動物やその鳴き声、身近にある果物の名前、色、数字、その他、クラスルームに置いてある備品の名前などがある。これらの語句は、きちんとしたカリキュラムに基づいて使って導入しているわけではなく、今までの経験で、これくらいなら子供たちが習得できると思われる語句である。この一年間で、年少児クラスが扱った語句を挙げておく。

簡単な挨拶言葉としては：“Good Morning, boys and girls” “Good morning, Mr./Mrs./Miss…” “Hello.” “How are you?” “I’m fine, thank you.” “Thank you.” “You’re welcome.” “Okay.” “Good-bye.” “See you next week/ Monday.” “What’s your name?” “My name is ….” “Do you like ….” “Yes, I do. I like…” “No, I don’t. I don’t like…” etc.

体の部位名では：head, eye, eyebrow, face, hair, nose, ear, mouth, lip, chin, hand, finger, nail, shoulder, tummy, back, foot, knee, toe, body, etc.

動物・果物名では：cat, dog, rabbit, bear, elephant, lion, mouse, squirrel, panda, monkey, koala, giraffe, pig, chicken, chick, snake, snail, butterfly, fruit, apple, orange, tangerine, strawberry, banana, watermelon, grape, etc.

クラスルームにある備品名では：piano, book, pen, pencil, bag, whiteboard, eraser, marker, trash, can, clock, picture, desk, chair, etc.

その他の表現では：Stand up. Sit down. Look at me /this/that. Raise your hand. Be quiet. Repeat after me. Say once more, please. Right. Good. You are smart. Give me… Here you are.

etc.

形容詞では：long, short, large, big, small, short, blue, red, white, black, yellow, purple, brown, green, gold, silver. etc.

そして動物の鳴き声では：bow wow, oink, moo, meow, baa, neigh, squeak etc. などが授業でもに使われる。

これらの語や語句は100ほどあり、1年間で年少児クラスの園児たちに覚えてもらおうとするのだが、昨年の例だと7から8割ほど覚えている子供もいるにはいるが、大多数の子供にとって、週に1回だけの「英語の時間」だけでは、やはりこれだけの量を覚えるのは無理があるようである。もっともこれらの語句は授業では少なくともインプットはされているのだから、アウトプットができないからという理由では、覚えていないということにはならないのかも知れない。

## 6. カリキュラムと幼稚園の英語教育について

昨年から、筆者は園児たちにつくば国際短期大学付属幼稚園で英語を教え始めたが、かつて他の幼稚園で5年程教えた経験もあり、カリキュラムの必要性は認めているながら、あまり考えずに授業を進めてきた。理由のひとつは、幼稚園で実際に教え始めるまでは幼児の英語教育については深く考えていなかったことと、もうひとつは、年少児クラスの授業を受け持つということで、カリキュラムを作成しそれに準じて教えるよりも、まずは年少児クラスの園児がどれほど英語に興味・関心を示すのかとか、年間にどれほどの英語を覚えることが可能であるのかとか、それらのことを理解する方がカリキュラム作成よりも先にすべきことであると考えた。しかし、教え始めてから1年以上が過ぎ、幼児の英語にたいする興味や関心の持ち方もある程度理解できてきたので、次年度からの授業にはカリキュラムに基づいた授業をしていこうと思っている。

カリキュラムを作成するおもな理由としては、(1)授業の方向性あるいは目的を明確にし、そのための授業計画をたて、それが実行できるかどうかを判断するため、(2)幼稚園のスケジュールや行事と連携させ、効率のよい授業をするため、(3)幼児英語教育のノウハウを蓄積するため等が考えられる。

年少児相手のカリキュラムだと、英語の音やリズムに対して敏感な年齢にあるので、できるだけたくさんの英語の音をきかせ、声に出し、体を使って理解させるようにするのが良いだろう。しかし、幼稚園で英語を教える時間は限られているので、効率性を高めようとするなら、幼稚園のスケジュールに準ずるようなカリキュラムを考え、園の行事に合わせた英語の歌などを取り入れていくのが良いと思われる。できれば、園の先生にも協力してもらい、普段の授業においても、英語の歌を歌えば、例えば、クリスマスの前などはクリスマスの英語の歌等を歌うようにすれば、園児たちはより自然なかたちで英語に触れることになるだろう。クリスマスなどの行事は子供の記憶にずっと残るので、行事を上手に生かせるようなカリキュラムにしたい。

カリキュラムを作るにあたって、考慮すべきことは歌をはじめとして、どのような言葉や絵カード、そして絵本を選択すれば良いかということである。言葉や挨拶言葉の選択にあたっては、だいたい今までの語彙でインプットは十分であると思えるが、できれば、反応が低い園児がいるので、アウトプットを高めるような方法を考えたい。

歌については、今までに歌ったのは前に述べたように5～6曲であるが、あと数曲は増やしたい。歌を歌うことは、どの子供も好きだし、歌っているうちに自然に英語独特の音声やリズム感が身についてくるからである。それに加え、歌っていると、クラスの雰囲気が盛り上がり、楽しく授業を進めることができるからである。

絵本については、1度だけ授業で使ったことがあるが、年少児のせい、園児たちが絵本にあまり興味を示さなかったため、その後は使っていない。英語だけで絵本を読み聞かせることよりも、歌を歌ったり身体を動かしたりする方が年少児は楽しそうである。しかし、年中児や年長児を教えている先生の話では、絵本に対して、強い関心を示すとのことなので、絵本の選択や使い方次第では良い教材になるかもしれない。

## 7. 早期英語教育の是非について

つくば国際短期大学附属幼稚園では、現在「英語の時間」において、園児たちに授業を実施しているが、このこと自体、日本社会のグローバル・ボーダーレス化の流れであるといえる。ここ土浦市や隣のつくば市においても、外国人の子供が在籍している幼稚園や小学校も多数あり、その対策に頭を悩ませている先生方も実際にいるのである。この地域においては、英語やその他の外国語を使つてのコミュニケーションをとることは、研究所や会社のみならず、幼稚園や小学校においてもすでに生じている。

早期英語教育の効果については、多くの人が認めている一方、幼稚園や小学校の早期英語教育の導入には反対している人もいる。その理由としては、ひとつには、英語の難しさがあると思える。たしかに大多数の人にとって、中学校、高校、あるいは大学まで勉強してきたのに、実際には簡単な会話や挨拶さえもできない。つまり、自分たちの経験から考えて、このような難しい英語を小さいうちから教えるのも無理だろうし、ますます英語が嫌いになる恐れもあるということだろう。もうひとつの理由としては、日本語がまだしっかりと固まっていない時期に英語を始めたら、子供の日本語がおかしくなりはしないかとか、心が不安定になるのではないかという不安である。たしかに、日本の子供たちにとって母語である日本語はたんにコミュニケーションの道具として必要なだけでなく、情緒の安定や心の発達、アイデンティティーの形成にとってなくてはならないものである。

研究者の中にも、英語は日本語をまず完全に習得してから、始めた方がいいという意見もある。バイリンガル研究者の小野は、日本人にバイリンガルが少ないのは言語環境におもな原因がある



ので、無理して早期教育をするよりも日本語の基礎が確立した後、中学生になってから目的意識をもって英語学習をした方がいいと主張している。さらに、帰国子女や外国滞在子女のセミリンガルの問題をとりあげ、セミリンガルとは日本語も外国語も年齢レベルの言語力に達していないことであるが、セミリンガルになった子供は、一生涯、知的活動に障害をもつことになるので、そうならないように、まずは母語を大切にすると警告している。しかし一方、日本で週に1～2回の英語教育では本当の意味での英語環境とはいえないし、日本では特殊な例を除いては、早期英語教育は毒にも薬にもならない、せいぜい興味を持つぐらいであると述べている<sup>6)</sup>。

今、騒がれている日本の英語教育の問題は、従来の授業方法では日本人の英語力、とくにコミュニケーション能力においては不十分であり、今世紀の日本においては、英語力を高めない限り世界から取り残される怖れがあり、何としても英語力をアップさせたいという社会的背景がある。それには、子供の人間形成にとって必要な母語としての日本語を損なわない限り、なるべく頭が軟らかく、吸収力が高い幼稚園児ぐらいの年齢から徐々に英語の勉強を始めていったほうがより効果的であろうということである。とくに、日本語以外の音声を拒絶する年齢になる前に英語の音を聞かせることにより、リスニングやスピーキング能力を高めようということ、及び、低年齢のうちから、外国人と接し、英語を聞いたり話したりしていれば、将来コミュニケーションに必要な国際性が自然に身につくだろうということである。

## 8. 早期英語と英語ブームについて

つくば国際短期大学付属幼稚園の例でもわかるように、週1回だけの授業にもかかわらず、年少児クラスにおいても簡単な挨拶や動物の名前を英語で理解できる園児が何人もいることは、子供の言語習得能力の素晴らしさをあらわしているといえよう。

子供の言語習得能力の早さは、外国で暮らした経験がある人なら誰でもわかることだが、親がいつまでたっても外国語を話すのに苦勞をしているのに、小さな子供は親を追い越しどんどん現地の言葉で、しかもネイティブのような発音で近所の子供たちと話しをするようになる。また帰国子女の例から考えてもわかるように、外国語が話せるということは、言葉だけではなく、もの見方や考え方も日本のとは違う、よくいえば国際的なものを身につけているのである。

今後ますます国際化していく日本にとって、早期の英語教育は、大学入試や TOEFL 等の資格試験の英語に役立つとは思えないが、少なくとも英語や外国の世界に興味を持つこと、及び耳から入るコミュニケーション英語を勉強することにより、発音もきれいになると思われる。幼稚園は子供たちがそのような英語を始める良いきっかけとなろう。

つくば国際短期大学付属幼稚園では、昨年からは英語教育を始めたのであるが、ここ土浦・つくば近隣の幼稚園でも英語を教えているところが年々増加してきている。子をもつ母親たちの熱心な早期教育の影響もあり、幼児の英語ブームが起こっている。リクルートの調査でも、母親の5

人に1人(19.3%)が2歳以下の赤ちゃんに絵本やビデオで英語教育をしており、子供の年齢が上がるとその割合もさらに高くなるとのことである<sup>7)</sup>。また静岡県にある加藤学園のように幼稚園児から本格的なバイリンガル教育を目指して英語のイメージ教育を始めたところや<sup>8)</sup>、英語を使って保育をおこなうインターナショナルスクールのような幼稚園なども出てきた。

つくば国際短期大学付属幼稚園において、英語のブーム度を調べるのに、「英語の時間」は別にしても、放課後にネイティブの教えている希望者のみの英語クラスの園児数を調べれば概略的なブーム度は測れるだろう。このクラスに参加している園児の割合を数値的にみると、園児全体では27パーセントが授業を受けている。内容的にはそれぞれ年少児24パーセント、年中児28パーセント、年長児31パーセントとなっており、リクルートの調査と同様に年齢が上がるとそのパーセンテージもさらに高くなっている(資料 表4)。

## 9. まとめと今後の課題

昨年からは幼稚園で英語を教え始めてから2年近くになるが、年少児は短期間にもかかわらず英語をおおいに楽しみ、単語や表現などもけっこう覚えたようである。ただし、年少児の場合は、個人差が強く、たくさん覚えている子供がいる、一方、ほとんど何も覚えていない子供もいる。その差は、性格的に明るく、英語の時間をより楽しんでいる園児のほうが、そうでない園児よりも英語の理解度が高いように思えたが、担任の先生への聞き取り調査の結果、母語である日本語の運用能力度、及び月齢による差が、英語の理解度の差に関連していることが分かった。

年少児の授業については、英語を楽しませることだけ考え、いろいろ創意工夫をしながら進めてきた。カリキュラムのことはあまり考えずに進めてきたが、今後はカリキュラムを弾力的に利用しながら進めたい。内容的には、やはり歌を歌うことや、絵カードを使って楽しませること、体全体を使って自然に英語を定着させる方法を考えていく。

幼稚園の英語は、ヘッドスタート的な要素もあるが、その目的は将来における英語力のアップと国際性を身につけることにある。英語力のアップといっても、入学や資格試験のための成績アップを目指すものではなく、英語という日本語とは異質の言語や日本以外の世界を自然に認識し、将来英語を本格的に勉強し使うようになったとき、違いに対し違和感を持たない、国際性豊かな人材を育てることにある。

英語は現在事実上の国際語になっており、今の子供たちは将来生きていくうえで今以上に英語力が必要とされることは間違いないと思える。その事実を多くの人々が認識しているからこそ、現在、英語の第三次ブームが起こっている訳だが、この英語ブームは世界的な流れであり、日本だけ乗り遅れるわけにはいかないのである。なかには、静岡の加藤学園のように、英語を第二言語として捉え、本格的なイメージ教育を幼稚園からスタートさせ、バイリンガルの子供たちを育てようとしている教育機関や、英語を使って保育を始める幼稚園等も現われてきた。つくば

国際短期大学付属幼稚園においても、ブームと呼ばれる動きはみられた。

今世紀に入り、日本の英語教育は大きく変わろうとしているし、また変わらざるを得なくなってきたことは確かであろう。それは幼児教育にとっても同じことである。

今後の課題としては、この地域における幼児英語の実態をより明確にするため、

- ・本園の保護者の幼児英語に対する期待感や要望。
- ・県南地域における幼稚園・保育園で英語教育の実態。
- ・県南地域における幼稚園における外国人の子供の人数。

等を研究したい。

### 参考文献

- (1) 文部省『21世紀を展望したわが国の教育のあり方について－第15期中央教育審議会第一次答申』ぎょうせい 1996
- (2) 鳥飼久美子「TOEFL TOEICと日本人の英語力－資格主義から実力主義へ」講談社現代新書 2002
- (3) 坂本姫子・法師人辰娘『日本の子供にどう英語を教えるか』はまの出版 1998 p. 56
- (4) 松香洋子『子供に英語をしゃべらせたい－児童英語教育、私の方法』KKベストセラーズ 1993 pp. 120－125
- (5) 坂本姫子・法師人辰娘『日本の子供にどう英語を教えるか』はまの出版 1998 p. 56
- (6) 小野博『バイリンガルの科学』Blue Backs 講談社 1994
- (7) 松香洋子「子供に英語をしゃべらせたい－児童英語教育、私の方法」KKベストセラーズ 1993 pp. 20－23, 34
- (7) 読売新聞 2002. 11. 6
- (8) 船橋洋一『あえて英語公用語論』文芸新書 文芸春秋 2000 Pp. .s125－133

資料

表1 年少児クラス月例と英語理解度（平成14年12月現在）

月齢	1.37	41	44	45	46	47	49	50	51	52	53	54	55	56	57	平均月例 50.3ヶ月
人数	1	2	2	1	4	4	6	2	4	5	3	6	5	5	5	合計 55人
理解度 スコア	1	1	1	1	2	1	2	2	2	3	2	1	3	1	3	
		1	1		1	2	3	2	3	1	2	3	2	1	3	
					2	2	3		2	2	3	2	2	1	3	
					1	1	2		1	1		2	2	2	2	
							1			1		3	3	1	2	
							1					1				
合計スコア	1	2	2	1	6	6	12	4	8	9	7	12	12	10	13	月例と英語の理解度相関 r = .597
平均スコア	1.00	1.00	1.00	1.00	1.50	1.50	2.00	2.00	2.00	1.80	2.33	2.00	2.40	2.00	2.60	

図1 英語理解度と月例の相関

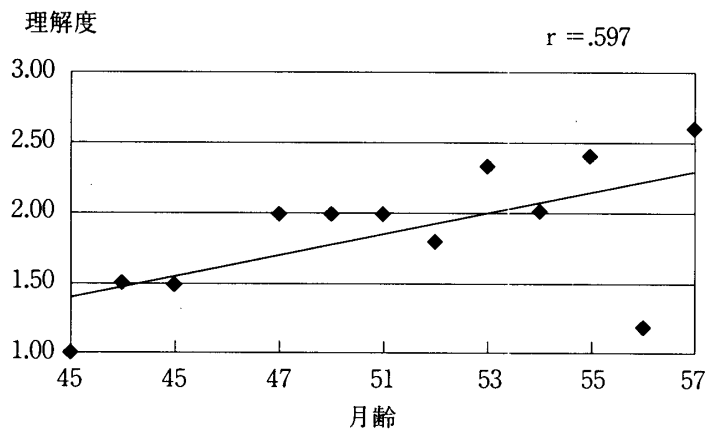


表2 A組 園児 月例（平成14年12月現在）

園児NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
月 齢	47	53	46	51	48	45	54	54	56	48	48	53	56	52	56	46	49	53	55	54
日本語	1	3	1	2	2	1	1	3	3	1	1	2	2	2	3	2	2	2	2	3
英語	2	3	1	1	2	1	2	2	2	1	1	2	2	2	3	2	2	2	2	3
B組園児	21	22	23	24	25	26	27	28	29	園児数 29										
月 齢	47	50	56	49	55	50	56	51	52	平均月例 51.4ヶ月										
日本語	1	3	3	3	1	1	3	1	3	日本語と英語の相関係数										
英語	1	2	3	2	1	1	2	1	3	(r = .792)										

注 日本語・英語とも、理解度スコアは、よくできる3、少しできる2、ほとんどできない1

図2 日本語と英語の相関

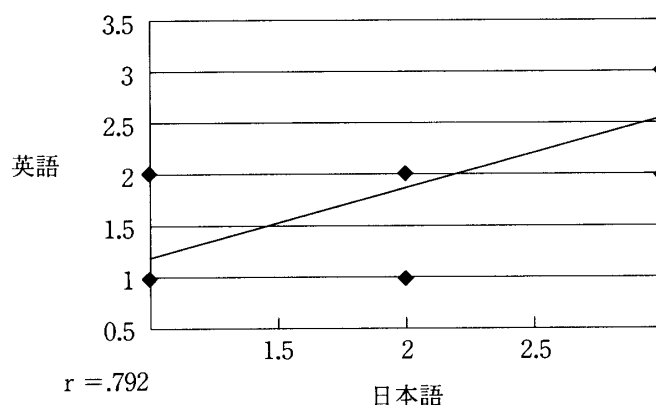


表3 B組 園児 月例 (平成14年12月現在)

園児NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
月齢	54	51	55	55	50	47	48	46	55	53	54	50	47	53	46	51	51	48	53	52	48
英語	3	3	1	1	2	1	2	2	1	1	2	3	2	3	1	1	1	3	1	2	3
園児NO	22	23	24	25	26	園児数26 園児NO 22~26は中途入学者 (満3歳時にて入学) で、学年としては1つ下になる。 平均月例 49.0															
月齢	41	41	44	37	44																
英語	1	1	1	1	1																

注 英語の理解度スコアは、よくできる 3、少しできる 2、ほとんどできない 1

表4 放課後英語クラス

	クラス名	園児数	参加数	パーセント	
年少児クラス	年少児クラスA	29	6	20.7%	24.0%
	年少児クラスB+満3歳児入学	21(5)	6	28.6%	
年中児クラス	年中児クラスA	26	9	34.6%	27.8%
	年中児クラスB	28	6	21.4%	
年長児クラス	年長児クラス	32	10	31.3%	31.3%

注 満3歳時入学は中途入学者なので、パーセンテージの計算には含めていない。